

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 16 cm。背面は淡褐色で褐色の縦斑がある。腹は白色、腰は灰色。成鳥オスは頭頂、顔、胸が黒く、眉斑と喉の黄色とのコントラストが鮮やかである。メスはオスの黒と黄色を抜いた程度に地味な褐色をしている。雌雄ともに冠羽があり、よく立てる。冠羽を立てる点ではカシラダカに似るが、本種はメスにも眉斑と喉に淡い黄色味があるので区別できる。餌としてマツの種子、イネ科・タデ科・ハコベなど多種の種子を採る。冬季は小群で生活することが多い。冬鳥(対象:越冬地)。

2. 分布

国外では中国の南西部と北東部から朝鮮半島、ウスリー河流域などで繁殖する。国内では全国に飛来し北海道の南西部の一部と本州以南で越冬する。渡来数はそう多くないが西南日本の方が比較的数量が多い。朝鮮半島経由で渡ってくるものが多いからと思われる。長崎県対馬と広島県での繁殖例がある。県内にも広く分布するが、伊豆では今回は記録されなかった。

3. 生息環境

低地から山地の明るい林や林縁に生息する。林内の地上や山道において採餌する。

4. 生息状況

低地から山地にかけての落葉広葉樹主体の林たとえば丸火自然公園や、アカマツ主体の林たとえば県立浜北森林公園のような明るい林に生息数が多い。中部地域の記録はもともと少ないが、西部地域での減少が著しい。たとえば1997年まで継続的に越冬していた桶ヶ谷沼では、エネルギー革命及び自然環境保全地域指定で地域の生活活動が森林に及ばなくなったこと、松枯れの急速な進行による照葉樹林化が進んだ結果、2006年までは断続的に渡来していたが、それ以後の10年間ではホオジロ科の越冬数が顕著に多かった2015年の2羽のみの記録にとどまっている。植生の変化による影響が大きいと思われる。県立浜北森林公園でも著しい松枯れの影響を受けて植生の変化があり、減少している。

5. 減少の主要因と脅威

里地里山の人の生活とのかかわりで管理され、安定していた植生の変化(53)による影響が大きいと思われる。

6. 保護対策

広域的な植生の維持や過度に遷移した植生の回復は、きわめて難しいことである。しかし、浜北森林公園で現在アカマツ林に関して枯死木の伐採や再生事業に力を入れていることは、今後の植生環境及び餌事情に関して本種にとって好ましいことと思われる。

7. 特記事項

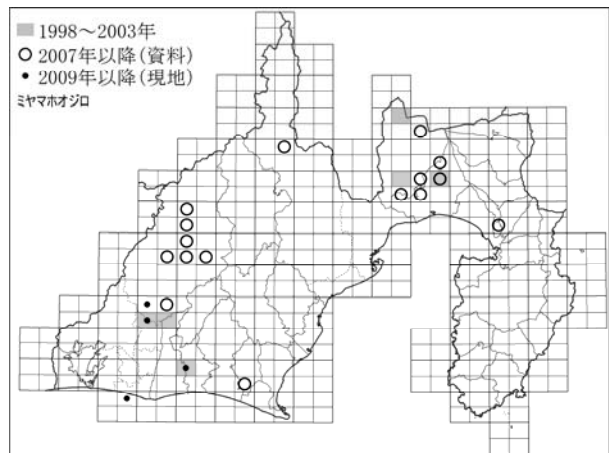
特になし。

8. 主な文献

- 高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.
北川捷康 (2016) 桶ヶ谷沼の鳥類生息調査—平成28(2016)年度— :3-4.



©2019 K.Kitagawa
浜北区県立森林公園 2007年3月 北川捷康



(北川捷康)

1. 種の解説

全長約 34 cm。雌雄同色。頭頂から後頭に黒褐色の太い横斑があり、灰褐色の眉斑と黒い過眼線、背は黒褐色で雨覆は赤褐色で黒、白、灰色など複雑な模様をしている。淡褐色の体下面には褐色の横斑がある。眼は頭頂近くにある。長い嘴で主に地中のミミズなどを採食し、昆虫類の幼虫や陸産貝類なども採食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア・シベリア南部、モンゴル・中国東北地区で繁殖し冬は南へ渡る。国内では北海道、南千島、本州北部、本州中部、本州南西部、佐渡、隠岐、見島、四国、九州、対馬、男女群島、屋久島、種子島、伊豆諸島、小笠原諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島に分布する。北海道では夏鳥、本州中部以北で留鳥、本州中部以南では冬鳥として分布する。県内では広域で記録はあるが、主に夕刻から採餌活動に入りほとんど鳴くこともないので観察例は少ない。

3. 生息環境

平野部から山地の落葉樹林や針葉樹林のやや湿った林床、公園などの芝地、畑、水田、湿地、河川敷、竹林、果樹園、低山の谷戸環境などに生息する。

4. 生息状況

本種の習性から平地から低山まで記録はあるが少ない。静岡県レッドデータブック (2004) 後も、伊豆、東部、中部では各 1 メッシュのみ、西部では 8 メッシュの記録となり大きな変動は見られない。分布が西部に偏る傾向も同じである。本種が主に夕刻から採餌活動に入るため観察し難いことが推察され、正確な生息状況の把握は難しい。私信として、2016 年 12 月に花川河口湿地で轢死個体 1 羽を、2017 年 2 月に細江天池 (谷戸環境) で捕食された残骸 (羽) を確認している。

5. 減少の主要因と脅威

雑木林、竹林、耕作地、水田、湿地などの開発による消滅 (15-1、15-2)、施業放棄林の生物多様性の劣化 (54) が加速し餌場としての生息環境の消滅が危惧される。里山林の荒廃に伴う遷移の影響 (53) もあげられる。

6. 保護対策

「狩猟鳥」からの指定解除と、主な餌となるミミズが生息できる環境の創出・育成が望まれる。

7. 特記事項

特になし。

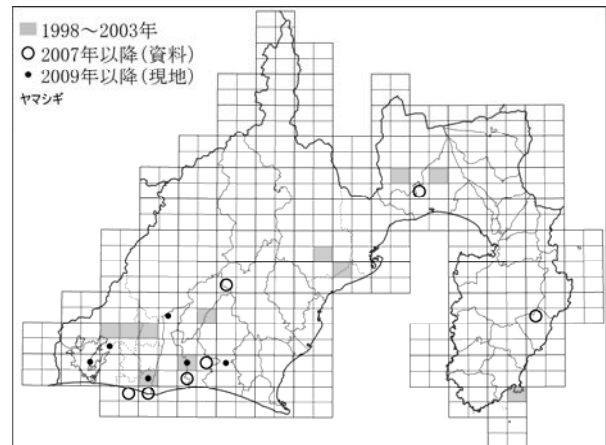
8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(森田剛則)



富士市岩本岩本山公園 2018年2月9日 渡邊修治



オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield, 1821)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 24 cm。全身茶褐色で黒褐色の細かい斑がある。雌雄同色。3.4 cm ほどの羽角がある。黒い瞳の周りの虹彩は橙色である。形態がよく似て少し小型のコノハズクは、虹彩が黄色く脚の指を羽毛が覆っていないことで区別される。餌は小鳥類、昆虫類も食うが、特に冬期はネズミ類が多いようである。留鳥(対象: 生息地)。

2. 分布

国外ではサハリン、ウスリー地方、中国東部からインド東部にかけての東南アジアに分布する。国内では全国の低地から山地の林に分布する。北方で繁殖したものの一部は秋冬に南方へ移るものもいる。県内では記録は少ないが、繁殖期にも記録されている。

3. 生息環境

繁殖期は標高 500~1,000 m ぐらいの山地の針葉樹林や広葉樹林に生息すると言われるが、冬期は平地の人の生活圏にも生息する。樹洞に営巣するため、大きな樹木のある比較的発達した常緑あるいは落葉広葉樹林を好む。冬期には木の茂みや竹林の中の常緑樹などを休み場にしてしているとされるが、樹洞や巣箱を利用することもある。

4. 生息状況

夜行性でありさえずりも姿も目立たないために生息状況はよく分かっていない。冬期に事故によるケガで動物園に持ち込まれる例や死亡例が他の猛禽類より多いこと及び最近 8 年間の筆者の冬期標識調査によれば、32 ポイントのうち 6 ポイントで標識放鳥をしており、従来の認識より越冬数は少なくないのではないかとの印象を持っている。

5. 減少の主要因と脅威

県内ではアオバズク、コノハズク、ブッポウソウなど、繁殖に樹洞を利用し昆虫食で大きさの似た仲間が軒並み個体数・生息地を減少させている。本種の食性は昆虫類が主ではないが樹洞を提供する大径木の減少(11)の影響は無視できない。

6. 保護対策

越冬期に巣箱を利用することがわかっていることから、地域限定的には巣箱かけが有効と思われる。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

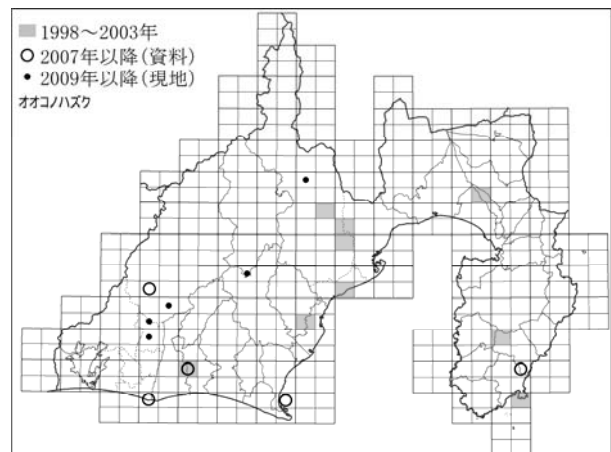
高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

(北川捷康)



©2019 S.Watanabe
静岡県 1995年12月27日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 36 cm。橙褐色の体色に黒褐色の縦斑がある。体上面は茶褐色で濃淡の斑がまじり、下面腹側は白っぽく黒褐色の細い縦斑がある。羽角は 4~5 cm あり、虹彩は橙色である。よく似たコミミズクは羽角が 2 cm と短く、虹彩は黄色であることで区別できる。夜間に活動し、餌はネズミ類を好むが、モグラ類、小鳥類、昆虫類も食う。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸と北米大陸の温帯から亜寒帯にかけて繁殖し、北部のものは南へ移動して越冬する。国内では本州中部の一部を含めてそれ以北で繁殖し、その他の地域では冬鳥として分布する。県内では冬鳥としてごく少数が局地的に分布する。

3. 生息環境

平地から山地の森林に生息する。山地では針葉樹林にも生息する。県内の観察例では、平地の農家の屋敷林、工場の片隅の数本まとまった常緑広葉樹、小学校の敷地内の常緑樹、海岸保安林などにねぐらをとっていた。越冬期には数羽の群れでねぐらをとる習性がある。平地の採餌場所は河川敷、農耕地、疎林などと思われる。

4. 生息状況

1994~98 年にかけて、磐田市竜洋で 4 羽前後の越冬が記録されている。今回の調査期間には 2007 年に浜松市の海岸保安林、2009 年に浮島ヶ原で渡り途中と思われるものが記録された。また、2012~14 年にかけての 2 越冬期に西部の小学校の敷地内で各年とも 1 羽の利用があった。敷地内のカナリーヤシの木をねぐらにしていたが、2013 年 12 月に周辺の樹木の枝打ちなどの手入れをした後は利用しなくなった (山田久子氏私信)。夜行性であることとほとんど声を発することがないので観察機会が少ないことは否めない。ふつうは数羽が集まってねぐらをとるが、今回の記録はすべて 1 羽であることから、越冬個体数が少なくなったことが推測される。

5. 減少の主要因と脅威

採餌場となる河川敷、農耕地、休耕地、草原などの減少 (13、16) や環境悪化。植生遷移 (54) による裸地や丈の低い草地の減少に関して、ツル性植物の蔓延による広範囲の被覆が採餌場を奪っている状況は憂慮される。

6. 保護対策

河川管理に関して、採餌場となる河川敷や堤防の法面の植生の管理が求められる。

7. 特記事項

植生遷移の問題について、コミミズクの「7. 特記事項」の項 (p88) 参照。

8. 主な文献

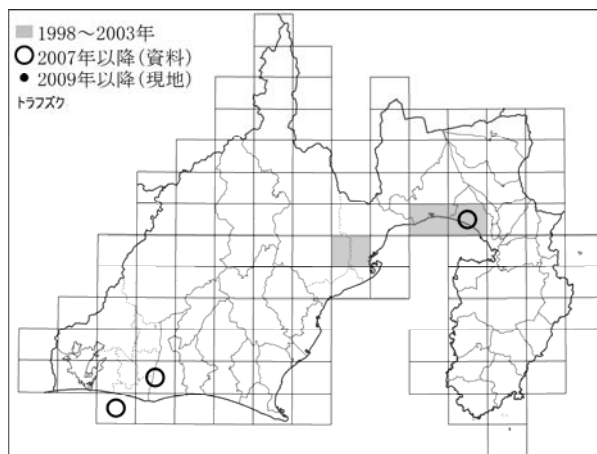
北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



©2019 N.Ogishi

磐田市 2012 年 12 月 25 日 小岸宣夫



静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN)]

1. 種の解説

全長約 23 cm。背面はやや赤味のあるオリーブ褐色で、腹と胸は赤褐色。成鳥オスは頭部から首、胸が黒色で、鮮やかな金色のアイリングが目立つ。メスは淡色でアカハラ *T. chrysolaus* のメスに似る。択捉島で繁殖し冬鳥として県内にも飛来するアカハラの亜種オオアカハラ *T. c. orii* のオスには頭部がかなり黒色の個体があるので、識別には注意を要する。昆虫類や植物の実を餌とすることなど一般習性はアカハラによく似る。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

日本固有種として伊豆諸島とトカラ列島に留鳥として生息する。伊豆諸島の主要な生息地は三宅島、八丈島、青ヶ島で、大島では 1992 年に繁殖が確認された。伊豆諸島南部の島での生息密度は高いが伊豆諸島北部の島やトカラ列島での生息密度は低い。県内では冬期の標識記録、観察記録がある。

3. 生息環境

繁殖地では常緑広葉樹林、落葉広葉樹林の自然林から二次林まで広く分布しており、常緑広葉樹の自然林で低木層がまばらな環境での生息密度が高い。県内では常緑広葉樹の繁った社寺林などでの観察例がある。

4. 生息状況

主要な繁殖地である三宅島ではネズミ駆除のために導入されたイタチによる食害に加えて、2000 年に起きた火山活動により、個体数が大きく減少している。県内には伊豆諸島で繁殖する個体が大島を経由して伊豆半島に渡り、各地に分散すると考えられている。近年の県内での記録はきわめて少なく、今回の調査期間には 2008 年伊東市の文献記録 1 例があるだけである。

5. 減少の主要因と脅威

三宅島、八丈島、青ヶ島では、道路工事などに伴う生息地の自然林や二次林の伐採や分断化 (11、24) により、生息環境が悪化しているという。さらに三宅島では天敵の捕食 (52-3)、2000 年の火山活動 (55) の植生の回復が進まないなど繁殖地の問題が大きい。伊豆大島で長年鳥類の生息調査を続けている望月英夫氏によると近年は大島での生息はほとんど記録されていないとのことである (私信, 2017)。県内における観察記録の減少は、県内の事情とは関係なく、繁殖地の要因によるものと思われる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 50 年)。1996 年 2 月 29 日下田市爪木崎で本州初の標識放鳥個体が、3 月 3 日に同地で再放鳥され、本種の越冬地を示唆するとされた (公財 山階鳥類研究所, 1997)。

8. 主な文献

望月英夫 (1993) 伊豆大島でのアカコッコの繁殖. 鳥, 41(1): 22-23

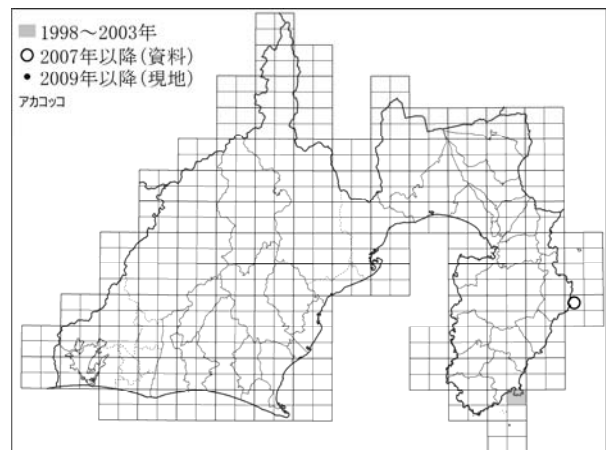
財団法人 山階鳥類研究所 (1997) その他の希れな記録 4 アカコッコ. 平成 8 年度 鳥類標識調査報告書 (鳥類観測ステーション運営), p. 17. 財団法人 山階鳥類研究所, 我孫子市.

北川捷康 (2018) 県版 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

静岡の鳥編集委員会 (2010) 静岡県の鳥類 第 2 版. 静岡の鳥編集委員会, :306 (北川捷康)



東京都大島町 1989 年 5 月 28 日 望月英夫



オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

全長 28~33 cm。長くまっすぐな嘴と短い脚を持ち、ずんぐりした体形のジシギ類の中で最も大型で淡色である。尾羽は 16 枚または 18 枚。オスは繁殖期に「ジッ、ジッ、ジッ、ズビヤーク、ズビヤーク」と鳴きながら飛び回り、「ゴゴゴゴ…」という音を出しながら急降下するディスプレイフライトを行う。地上から飛び立つとき「ゲッ」と太い声で鳴き他のジシギと区別できる。夏鳥(対象:繁殖地)。

2. 分布

国外ではサハリン南部、ロシア極東南部でも繁殖するが、日本が主な繁殖地である。冬期はオーストラリア東部からタスマニアに渡る。国内では主に本州中部から北海道、南千島にかけて夏鳥として渡来するが、広島県などの中国山地での繁殖も少数ある。県内では富士山麓の朝霧高原や御殿場高原に夏鳥として渡来する。春秋には旅鳥として水田や湿地などに立ち寄る。

3. 生息環境

草地、牧場、農耕地、河川敷、湿原など開けた環境で繁殖するが、灌木が点在する環境を好む傾向がある。

4. 生息状況

低地で繁殖する北海道とは異なり、県内では標高の高い広い草原で繁殖する。この条件を満たす朝霧高原と御殿場市の東富士演習場に渡来する。朝霧高原では繁殖地が開発で失われ、2017 年時点では渡来が確認されていない。それに対し環境変化のない東富士演習場では個体数は維持されている。

5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原では最も多数が生息していた灌木の点在する草原が、ゴルフ場(21)やオートキャンプ場(23)へと開発された。また、税制上優遇されるという理由で植林(16)されたために生息環境が失われたところもある。

6. 保護対策

現在残された生息地である東富士演習場は現状変更の可能性は比較的低いが、監視を続ける必要がある。

7. 特記事項

本種を要注目種(N-II 分布上注目種等)に選定したのは、分布上注目すべき繁殖群としての位置づけである。したがって、春秋の渡りの時期に県内各地を通過するものは対象外である。

8. 主な文献

飯田知彦(1991)オオジシギ *Gallinago hardwickii* の繁殖行動と生息環境. Strix, 10: 31-50

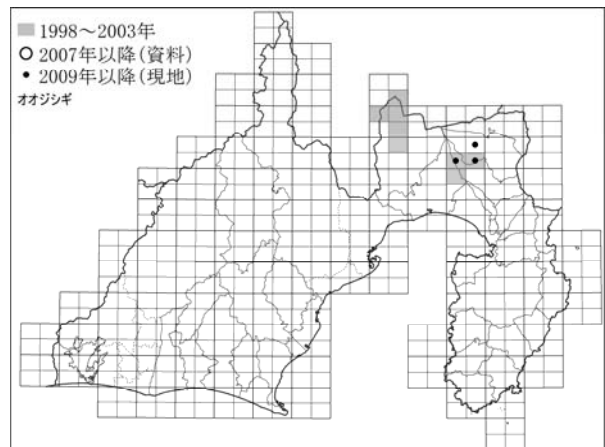
中村浩志(1996)オオジシギ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類 I, p. 103. 平凡社, 東京.

影山秀雄(2004)オオジシギ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック(動物編), p. 108. 羽衣出版, 静岡.

(渡邊修治)



沼津市原浮島ヶ原 2006年9月9日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 29 cm。まっすぐな長い嘴の中型のシギ。冬鳥として渡来する。雌雄同色。冬羽は全体に灰褐色の地味な羽色であるが、春の渡去前には全体に赤褐色の夏羽になる。体形の似たジシギ類とは体色が灰色であることと飛んだ時に腰上の白と次列風切羽の外縁の白線で区別できる。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではベーリング海峡を挟んだ両大陸の極北部の一部で繁殖する。国内では北海道、本州、四国、九州に冬鳥あるいは旅鳥として渡来分布する。県内では旅鳥として希に記録されることがあるが、磐田市の大池には例年渡来し越冬した。

3. 生息環境

水田、ため池、河口などにも生息するが、泥質の内陸湿地を好む。

4. 生息状況

磐田市の大池には毎年 1~3 羽が越冬していた。県内で越冬するのは大池だけで、その他の地域ではきわめて希な旅鳥として秋に短期間滞在するだけである。大池では早い年には 10 月初旬に渡来し、越冬後の 4 月下旬まで滞在し、夏羽になって渡去する。1995-96 年には 2 羽、1996-97 年には 3 羽が越冬している。ちなみに、渡来数の多かった 1996 年秋には、9 月 17 日に本種に近縁で嘴の短いアメリカオオハシシギの夏羽の残る個体 1 羽も観察している（北川、県内 2 例目）。オオハシシギ属にとっては、大池が好適な環境であると思われる。その後も毎年 1~2 羽の越冬があり、2008 年秋にも 3 羽飛来し越冬、2009 年 4 月まで滞在した。しかし、2009 年秋以降は記録が途絶えていたが、2014 年 10 月（中村）、2017 年 11 月（小岸）に各 1 羽が記録された。大池以外の記録は、2007 年 12 月に富士川河口、2016 年 11 月に焼津市田尻の記録がある。

5. 減少の主要因と脅威

2008-09 年に 3 羽も越冬したのに、その後突然、数年間飛来が記録されなくなった。直接的な理由は分からない。湛水防除事業で池底を広く深く浚渫（15-1）して以後、ヨシ原も縮小され、小魚の姿もほとんど見なくなった。水質及び本種の採餌場の泥質の干潟環境の悪化が指摘されている（ヨシゴイの項 p80 参照）。

6. 保護対策

磐田市大池の水質及び泥干潟環境の保全は必須である。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

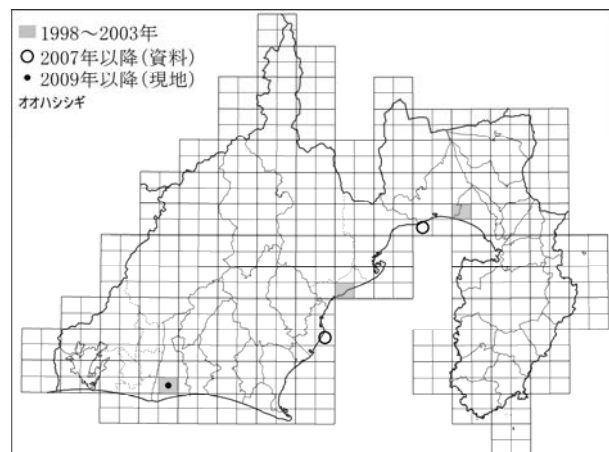
北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

鈴木 昇 (2018) 「大池の水質調査」(第 II 報) 現状の水質状態の把握と水質改善への提言:28-35

(北川捷康)



磐田市大池 2003年2月27日 北川捷康



オオワシ *Haliaeetus palagicus* (Pallas, 1811)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU)]

1. 種の解説

大型のワシで全長オス約 88 cm、メス約 102 cm である。翼開長オス約 221 cm、メス約 244 cm。成鳥は額と翼の前縁、脛から尾の部分が純白で他の羽毛はほとんど黒く、嘴と足は鮮やかな黄色である。幼鳥はほぼ全身褐色で白いまだら模様がある。年齢とともに成鳥の羽毛に近づき 5~6 年で成鳥羽になるとされている。サケ・マス類、スケソウダラなどの魚が主な餌である。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外では極東ロシアに繁殖分布し、国内では冬期、北海道、本州北部に渡来する。県内には希な冬鳥として海岸や河口部に渡来する。

3. 生息環境

餌は魚類、海鳥類などであるので、渡来地は海岸部や河口部であるが、時には河川沿いに上流部に移動することもある。他の大型鳥類同様に警戒心が強いので、採餌や休憩地は人が近づきにくい場所を選んでいると思われる。

4. 生息状況

以前はきわめて少ないながらも 1~2 羽の渡来数があり、ほぼ毎年県内のいずれかの場所で確認され、浜名湖、天竜川河口、大井川河口、富士川河口、駿河湾、焼津港などで記録があった。海岸や河口部で採餌し、夜は近隣の山中で“ねぐら”をとることが多いようであった。かつて定期的渡来があった場所でも、2010 年以降確認が途絶えている状況である。

5. 減少の主要因と脅威

詳細は不明だが、本種の生息環境を大きく低下させる要因は特になし (99) と考えられる。

6. 保護対策

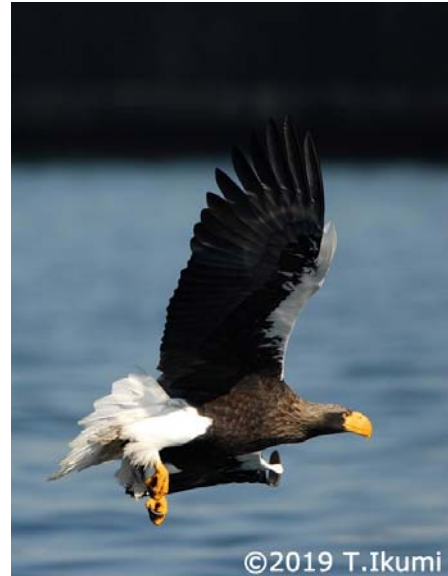
特になし。

7. 特記事項

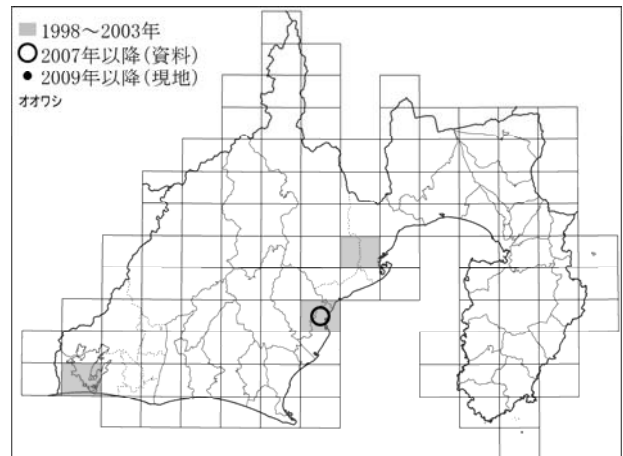
文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 45 年)。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成 5 年)。

8. 主な文献

森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男 (1995) 日本のワシタカ類。文一総合出版、東京、631 pp.
静岡の鳥編集委員会 (2010) 静岡県の鳥類 第 2 版。静岡の鳥編集委員会、静岡。 : 108



©2019 T.Ikumi
焼津市小川港 2007年2月12日 伊久美隆



(新井 真・近藤多美子)

ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* (Linnaeus, 1766)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長オス約 45 cm、メス約 50 cm。オス成鳥は頭部から胸と背面は灰色で下面は白い。初列風切羽の 6 枚のみ黒い。メスは褐色で腰が白い。翼上下面の風切羽にタカ斑が出るので、チュウヒのメスと識別できる。なお、チュウヒには羽色に個体変異が多く、オスの若鳥や褐色系には腰の白っぽい個体があるので、識別には注意を要する。チュウヒと同じように翼を逆への字形に保って飛ぶ。哺乳類のノネズミ類、鳥類（たとえばカモの仲間、ムナグロ、ツグミなど）を餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではヨーロッパからユーラシア大陸の亜寒帯を

通ってオホーツク沿岸までと北アメリカで繁殖する。国内では冬鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来する。県内では局地的で朝霧高原、天竜川、中遠地域、浜名湖周辺の農耕地・湿地にごく少数渡来する。

3. 生息環境

主に平地の開けた農耕地や草生地を主な餌場として生息するが、標高 800 m ほどの朝霧高原にも生息する。チュウヒ同様低空飛行して採餌するが、採餌場としての草生地の草丈はチュウヒよりも低い植生を好む。

4. 生息状況

きわめて少ない冬鳥として渡来する。いずれの分布地においても 1 羽が観察されている。チュウヒと同様に天竜川から太田川及び浜名湖付近に記録が集中して

いるのは、天竜川や太田川の河川敷及び中州のヨシ原、浜名湖周辺の養鰻池跡地のヨシ原が他地域よりも広く残っていることによると思われる。天竜川河口付近では 2002 年にはチュウヒと同一のねぐらを利用していたが、2002-3 年にかけて低水路内の隣接地で砂利採取の工事が行われ、ねぐらに入る時間帯より前に作業を終える配慮がなされたが、事後の利用はなくなった。その後、浜名湖畔の養鰻池跡地のヨシ原でもチュウヒとねぐらをともにしていた。朝霧高原では以前に比べて観察頻度が著しく低下した。

5. 減少の主要因と脅威

餌場になるヨシ原のある湿地や草生地の開発 (15-1、16) あるいは遷移による植生の変化 (54) で、採餌地やねぐらの消滅が直接的な主要因と思われる。

6. 保護対策

生息が確認されている地域のヨシ原やねぐら環境の保存が必要である。

7. 特記事項

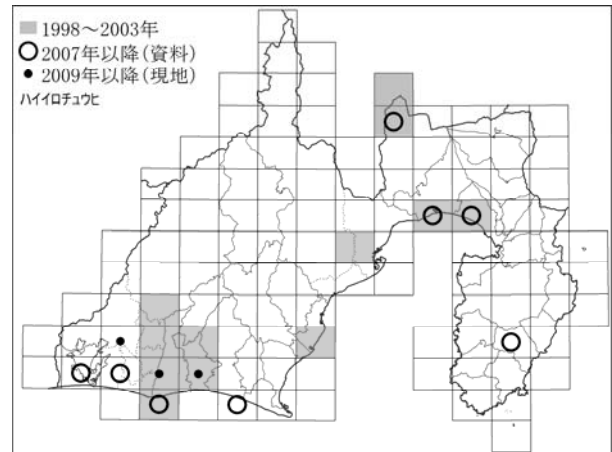
特になし。

8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



袋井市浅羽 2012年3月12日 大杉正也



(北川捷康)

ノビタキ *Saxicola torquata* (Linnaeus, 1766)

ヒタキ科 Muscicapidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 13 cm。オスは頭部からの上面が黒く、翼と腰から上尾筒に大きな白斑がある。胸はオレンジ色。頸側と腹以下の下面は白い。嘴、脚は黒い。メスは頭部からの上面は褐色で、黒褐色の縦斑がある。翼に白斑がある。淡褐色の不明瞭な眉斑がある。喉からの下面は淡褐色で、胸にオレンジ味がある。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸中部及び南部、アフリカ東部及び南部などで繁殖し、冬季は地中海周辺、アフリカ大陸北東部、アラビア半島、インド、東南アジアから中国南部に渡る。国内では夏鳥として本州中部以北で繁殖する。旅鳥として日本全国を通過する。先島諸島では越冬する。県内では朝霧高原や御殿場高原など富士山麓の高原で繁殖する。

3. 生息環境

平地から山地の灌木の点在する草地、牧草地、湿地、河川など開けた環境に生息する。渡り時には草地や河川敷だけでなく農耕地でも見られる。

4. 生息状況

県内では繁殖に適する山地の草原が富士山麓に限られ、東富士演習場と富士宮市の朝霧高原の一部でのみ繁殖が確認されている。東富士演習場では安定的に個体数が維持されているが、朝霧高原では 2000 年当時 4 つがいが繁殖していた北東部で、2017 年には繁殖が確認されなくなった。

5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原ではヒノキの植林 (16) のため繁殖地が失われている。朝霧高原北東部での減少の原因は不明である。

6. 保護対策

繁殖適地の、灌木が点在する草地の維持が重要である。

7. 特記事項

朝霧高原では草地がワイン用のブドウ畑に代わりつつあり、ノビタキが好んで採餌する大根畑が減少する傾向がある。一方、東富士演習場は毎年野焼きが行われ、草原が維持されている。

なお、本種を要注目種 (N-II 分布上注目種等) に選定したのは、分布上注目すべき繁殖群としての位置づけである。したがって、春秋の渡りの時期に県内各地を通過するものは対象外である。

8. 主な文献

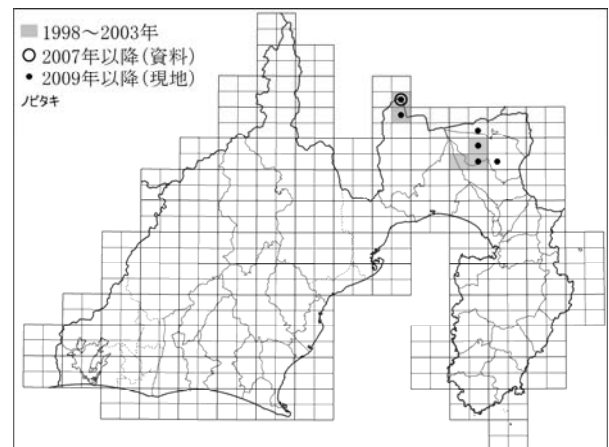
中村登流 (1997) ノビタキ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第4巻 鳥類II, p. 105. 平凡社, 東京.

影山秀雄 (2004) ノビタキ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック- (動物編), p. 109. 羽衣出版, 静岡.

(渡邊修治)



左：オス 朝霧高原 2000年5月10日 渡邊修治
右：メス 浮島ヶ原 2000年9月15日 渡邊修治



ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (Linnaeus, 1758)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー：なし]

1. 種の解説

全長約 57 cm。成鳥は頭から後頸及び背は濃紺色。他の部分は白か薄い灰色。後頭から 12~20 cm の白く細長い飾り羽がふつう 1~2 本伸びている。虹彩は赤い。雌雄同色。幼鳥は上面が褐色で白またはバフ色の斑が密にある。下面はバフ色に褐色の縦斑がある。夜行性であるが、育雛期には昼間も採餌をする。魚類、甲殻類、両生類、昆虫類などを餌にする。夜間に「コァッ」と聞こえる声でよく鳴くので「夜ガラス」という方言名がある。主に夏鳥として渡来するが留鳥として越冬するものもある。留鳥・夏鳥(対象：繁殖地)。

2. 分布

国外ではユーラシアの温帯以南、アフリカ、南北アメリカ大陸に広く分布する。国内では北海道ではほぼ夏鳥、本州以南では留鳥とされるが、標識調査により多くのものが越冬のためにフィリピン、インドシナ半島、台湾、中国南東部などに渡ることが明らかになっている。県内では平地に広く分布している。

3. 生息環境

海岸付近から丘陵地の水田、池沼、河川、湿地などを採餌地とし、林にコロニーを形成する。

4. 生息状況

もともとふつうに生息していたが、20年ほど前から減少が顕著となった。1989年に伊東市に約3,000羽のサギ類のコロニーが形成された。そのうち約3割の900羽ほどがゴイサギであったという。カタクチイワシ養畜の生簀を狙って集結したものであった。しかし、有害鳥獣駆除と活餌料需要の減少などで伊豆東海岸のサギ類のコロニーは衰退した(木部裕正氏私信)。その後の変遷は不明だが、2016-17年現在は沼津市(20巣ほど、渡邊)、藤枝市(幼鳥30羽、近藤)、焼津市(25巣、近藤)、静岡市清水区(20巣、小泉)、袋井市(成鳥15羽、北川)、浜松市北区(5巣、北川、10羽、森田)などのコロニーがある。

5. 減少の主要因と脅威

コロニーをめぐる人との軋轢がもたらす有害鳥獣駆除(41)、護岸整備や埋立などの池沼や湿地開発(13、15-1)、圃場整備(15-2)、河川改修(13)などによる餌場環境の悪化が大きな影響を与えている。

6. 保護対策

住宅地の近隣にコロニーを形成することがしばしばあり、育雛期の騒音・悪臭・糞害などで有害鳥獣駆除の対象になる場合がある。軋轢の予測が可能であれば、営巣開始前に追い払うという選択肢も考えられる。

7. 特記事項

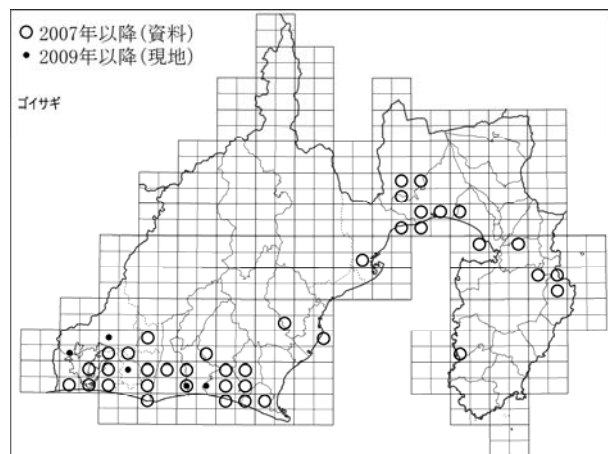
2016年からの全国鳥類繁殖分布調査中間報告によると、関東以西で分布の縮小が顕著であり、本種の増減率が「-54」で最も縮小している状況が明らかになった。一方、桶ヶ谷沼など静岡県の保全すべき湿地2ヶ所でアメリカザリガニが爆発的に増加し、希少種の水生昆虫類や植物を捕食・切断するという被害が起こっている。同地の古老から、昔からザリガニはいたが、本種がたくさんいて食っていたという話を聞いた。本種が生態系のバランスを保つ役割を果たす可能性と、今後見守る必要性から部会注目種とした。

8. 主な文献

植田睦之他(2018)分布の縮小した鳥・拡大した鳥。全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター, 13: 1 (北川捷康)



©2019 H. Nakamura
浜松市北区細江町 1995年6月10日 中村裕志



静岡県カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 57 cm、メス約 59 cm である。翼開長オス約 159 cm、メス約 163 cm。成鳥、幼鳥とも背面、翼と尾の上面が褐色で、下面は白い。頭部は白く、目から頸にかけて太い黒帯がある。特に胴体はほとんど無斑で純白に近く、飛翔時はきわめて白い鳥に見える。もっぱら魚を捕食する。留鳥または冬鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外では全世界に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に生息し繁殖する。秋には南に渡る個体もあり、冬期には繁殖していない地域でも観察される。県内では周年観察されるが、冬期には見る機会が増える。

3. 生息環境

海上、海岸、河川、湖、池など魚類を捕食できるところに広く生息する。捕った魚をつかんで数 km 移動し、安全な山中で食べることもある。営巣地では崖や樹上、鉄塔などの頂部に皿状の巣を造る。

4. 生息状況

県内でも、海岸や河川、ダム湖、ため池などに飛来する。伊豆では周年生息しており、繁殖が確認されている。他の地域でも周年見られる場所が多くなっている。

近年は全国的に新たな繁殖記録や山間地への進出もある。越冬期、河口部周辺で多数個体が観察されることは珍しくなくなった。富士川河口では最大 15 羽の記録もある (渡邊修治氏私信)。

5. 減少の主要因と脅威

特になし。

6. 保護対策

四国では、マツの枯死により自然繁殖巣が落下し、人工巣台設置による対策を実施した事例がある。

7. 特記事項

近年の観察例の増加は、個体数が増加しているためと考えられる。海岸・河口部周辺の環境変化や餌となる大型魚類の増加が関係しているのか、今後とも生息の動向を注視していく必要がある。

8. 主な文献

遠藤公男 (1996) ミサゴ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類 I, p. 147. 平凡社, 東京.

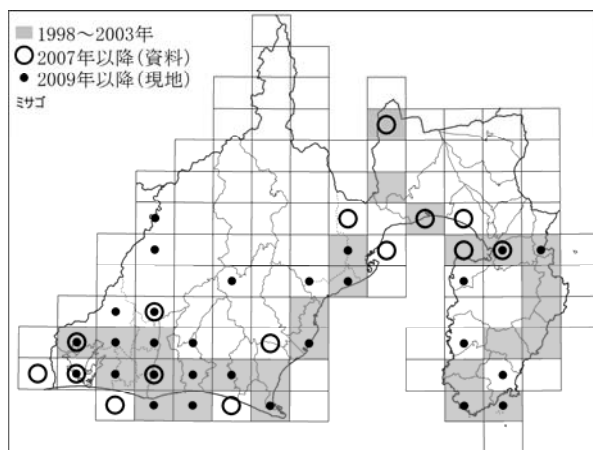
中屋敷誠司 (2009) 中筋川ダムにおけるミサゴの保護活動について. 平成 21 年度国土交通省国土技術研究会 (プログラム自由課題(一般部門)).

渡辺靖夫・越山洋三・先崎啓究・伊関文隆 (2012) フィールドガイド日本の猛禽類 Vol.1 ミサゴ. 西本真理子植物画工房マカロン, 岡山, 13 pp.

東 淳樹 (2014) コラム 6 山間地のダム湖および溪流の鳥類. ダムと環境の科学 III エコトーンと環境創出, pp. 233-236. 京都大学学術出版会, 京都.



©2019 S.Watanabe
富士川河口 2007年9月25日 渡邊修治



(新井 真・近藤多美子)

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

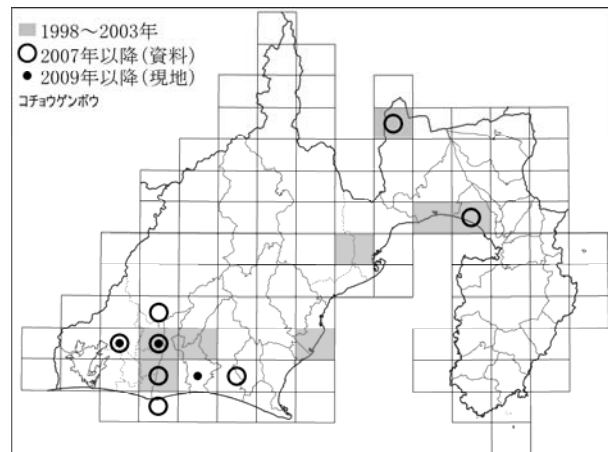
全長オス約 28 cm。メス約 32 cm。チョウゲンボウに似ていてさらに小型のハヤブサの仲間。オスは上面が青灰色、メスの上面は暗褐色をしている。よく似たチョウゲンボウは尾が長く、上面が雌雄ともに明るい褐色で羽端の黒色の小斑が目立つこと、頻りにホバリングをするが本種は滅多にしないことなどで区別できる。また本種の方が動きは敏捷で、飛んでいる小鳥類をスピーディーな飛翔で追跡し、ハヤブサのように蹴落とす方法を得意としている。小鳥類の他にネズミや昆虫も捕食する。冬鳥(対象:越冬地)。



天竜川 2002年12月30日 北川捷康

2. 分布

国外ではヨーロッパからベーリング海沿岸に至るユーラシア大陸北部及び北アメリカ北部に幅広く繁殖し、南へ渡って越冬する。国内では冬鳥として北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では西部にやや広く分布し、東部では局地的に分布する。



3. 生息環境

主に平地の農耕地、河川敷、草生地、湿地、灌木林など広々とした環境に生息する。似たような環境があるところでは標高 800 m 以上ある朝霧高原などにも生息する。

4. 生息状況

天竜川や太田川などの河川敷、朝霧高原、浮島ヶ原などで生息が記録されているが、どの生息地においても単独で生息し、個体数は少ない。小鳥を主食にし、天竜川河川敷の食事場にしていた場所の下にはカワラヒワやホオジロの仲間の翼などの羽毛が多数落ちていた。ねぐらは愛知県などで数羽が共有することが知られているが、本県ではまだ記録されていない。生息密度が関係しているのだろうか。

5. 減少の主要因と脅威

主な生息環境である農耕地、河川敷、草生地、湿地などの造成・改変・管理放棄など(13、15-1、16、53、54)が影響を与えていると考えられる。

6. 保護対策

主な生息環境である農耕地、河川敷、草生地、湿地などの造成・改変・管理放棄は最小限にとどめる配慮が求められる。

7. 特記事項

なし。

8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)